

土の音を聴く



＝ 農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一 ＝

いささか場違いな話となって恐縮であるが、筆者の趣味は何かと問われれば、畑仕事と尺八と答えている。畑仕事は、1993年に山梨県牧丘町（現・山梨市牧丘町）に竹林を購入して開墾し、1反の農地を確保して30年ほど週末農業を続けている。

尺八は出会って35年ほどになるが、まともに練習するようになって5、6年。もともと音楽好きで、就職して最初にもらったボーナスでフルートを購入したのが始まりである。楽器と教則本を買ってきたの独学につき、数年で壁にぶち当たり、別の楽器に乗り換え乗り換え……。フルートの後、ギター、リコーダー、横笛、ウクレレ、二胡、尺八と変遷してきたが、どうも笛系が体質に合っているらしい。現在は、うまくなれずに悔しくて続けている尺八がメインで、時々リコーダーのアンサンブルを楽しんでいる。

ここ数年は、東京の自宅から自転車で15分ほどの距離にある小金井市の某公民館で活動している「尺吹会」なるグループに入って吹いているが、漂泊の俳人・山頭火のご縁で交流いただくようになった「日本を代表する国際的尺八演奏家」の田嶋直士師に学ぶところが多い。田嶋師にはコロナ禍前、横浜で年に数回レッスンしていただいていたが、コロナ禍以降は仕事が忙しいのと、小金井のグループに参加するようになったため、足が遠のいていた。それが昨年12月初め、東京の日暮里サニーホールで開かれるコンサートにお声掛けいただいたことから、これを聴きに出掛けるとともに、年が明けて横浜にあるレッスン場に久しぶりに足を運んでみた。レッスンの1時間、尺八は吹かずに、専ら尺八談義をお願いした。

田嶋師は「数々のジャンルの芸術家と共演、一般に抱かれている先入観を大きくつがえし、尺八の持つ表現力の大きさ、対応の多様性を示す活動を展開している。12月のコンサートも「尺八家・作曲家コラボレーション ～古典と現代の衝突と邂逅～ vol.2」なるテーマで、いわゆる虚無僧尺八曲といわれる古典を演奏した後、その古典をモチーフに作曲家が書き上げた曲を奏でた。これが「衝突と邂逅」にふさわしく、実に刺激のかつ壮大で、宇宙的な広がりや深さを感じるとともに、躍動感にあふれた演奏で感激・感動。

このコンサートでの演奏も含めた尺八談義となったが、最も印象的だった一つが「ゼロ分の1」を目標に地道な積み重ねが必要という話。すなわち分子の「1」は、尺八がもともと多様な音が出るように作られていることを指し、分母には奏者の状態を置く。適切でない吹き方や奏者の誤った考えなどを減らすことで、分母を小さく

していくことが大切であり、分母が小さくなるほどに尺八は大きなエネルギーを発揮するようになるとのこと。続けて田嶋師は「農業に向き合っている蔦谷さんには、これが一番分かるはずだ」として、次のように語った。

農業の場合は、分子に土がくる。そして分母に置かれる資材などの外部投入を減らしていくほどに微生物の働きは活性化し、土の持っている能力が発揮され、畑は豊かな恵みをもたらすようになる。尺八も農業も、さらには大半の事象も構図・構造は同じ。人間は余計なことをしない。見掛けにとらわれた努力は不要。これが素晴らしい世界を開いてくれる、と。まさに反論の余地がなく、尺八の奥義に農業を含め、万物の本質を垣間見た思いがした次第。



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業。1971年農林中央金庫に入り、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、2013年11月より現職。



田嶋師の著作の表紙